

クサガメの流通管見

青木良輔 (神奈川県横須賀市)

On the trade of *Mauremys reevesii*

By Riosuke AOKI (Yokosuka city, Kanagawa prefecture)

現在の神奈川県横須賀市は、人口40万くらい。人口規模で全国40位程度のしがな地方都市である。ところが、1945年(昭和20年)の敗戦時には福岡市に次ぐ8位の「大都市」であった。私は1954年(昭和29年)生まれであるが、同じ年生まれ(?)の「ゴジラ」や「鬼太郎」に象徴されるように、戦後の復興も一段落しており、とりわけ、生まれ育った、この横須賀市は朝鮮戦争の経済効果で^{いんしん}殷賑をきわめていた。とはいうものの、金魚屋や小鳥屋はあっても、常時、カメを扱っているような店はなかった。1957年(昭和32年)以降から1961年(昭和36年)までの記憶では、毎年、地元の信用金庫の本店前に4月頃に現れる露店、5月の祭礼にやってくる露店のカメ屋、ときどきカメを置いているデパートの金魚売場、なぜか、時々、カメも売っている画材店といったところが、市内でカメを扱っている事業者であった。となりの三浦市の城ヶ島や藤沢市の江ノ島と行った観光地に行くと、カメを売っている土産物屋があつたが、暖かい時期に限られていた。母親の実家があつた東京都大田区蒲田でも状況は似ていて、国鉄蒲田駅西口の地下道を出たところに良く居たカメ専門の露天商や、毎週・土曜日の「縁日」に並ぶ金魚屋がカメも扱っていたが、店舗をもって、一年中、カメを扱っているような店はなかった。

1961年まで、子供の視界にはいる範囲の流通で見るカメのすべてがクサガメであった。サイズや体色によって「ゼニガメ」とか「キンセンガメ」という商品名がつけられていたが、すべてクサガメであった。昭和32年頃から、しばらくの間、「ゼニガメ」の価格は100円、「キンセンガメ」など大型の個体は80円くらいで売られていた。横須賀の露天商や祭礼のカメ屋は「ゼニガメ」すらもオスとメスに分けて売っていた。2匹買わせる工夫だったのであろう。オスとメスの見分け方は腹甲の黒斑部分が相対的に少ないのがオスで、多いのがメスだということであった(真偽のほどは未だに確かめていないが、おそらく嘘であろう)。カメはロー引きの大きな洗面器や^{かなだら}金盥に入っていたが、「キンセンガメ、オス、80円」などと洗面器にマジックインキで書かれていた。祭礼のカメ屋は親方風の老人と、2~3人の配下がいた。親方の話では、カメは九州の方で採ったものを持ってくるということであった。1961年の祭礼で、このカメ屋の^{たら}盥の中で生まれてはじめてニホンイシガメを見た。「みのがめ」という商品名で180円と高価だった。飼っているうちに^{たら}毛が生えてくるということだった。1962年(昭和37年)に国鉄蒲田駅の駅ビル屋上の金魚・熱帯魚売り場で甲長20センチ弱のイシガメを購入したが、これも500円と高価だった。この頃には流通でクサガメとニホンイシガメが区別され、しかも後者が高価ということが普通だったようである。

すくなくとも関東地方では、1945年以前に愛玩用に販売されていたカメはニホンイシガメであったようだが、戦後になってクサガメとの交替が起こったらしい。庄司直嗣氏(株式会社ビバリウム代表取締役)の御教示によると、ニホンイシガメは水に漬けると死ぬという理由で流通において嫌われていたという。これが交替の理由であつたらしい。水につけると死ぬというのは、いわゆる「イシガメ病」に因るものである。この疾病は皮膚糸状菌 *Aphanomyces* sp. の感染によるもので(鎌田・広瀬, 1998)、これを契機とした二次感染やストレスで死に至る場合が往々にしてみられる疾病である。鎌田篤氏(東京都港区・小動物診療所所長)の御示教によると、体表のマイクロフローラの均衡が水道水中の塩素剤で破壊され、塩素剤の作用を受け

ない *Aphanomyces* が卓越することが「水に漬けると死ぬ」ことの原因とみられる。飼育容器の水を交換したら「カビ」が生えてイシガメが死んだという経験をされた方は少なくないと思うが、おそらく、ほとんどの場合が水道の水が引き金になったトラブルである。GHQ (General Headquarters: 連合国軍最高司令官総司令部) の指示による塩素剤殺菌を基軸とした上水道の普及が市場からイシガメが姿を消す大きな理由であったと考えられるのである(青木, 2012)。

前述の蒲田の駅ビルの金魚・熱帯魚売り場では、1964年(昭和39年)に「広東産 クサガメ」というものを見た。よく見るクサガメに比べると明らかに体色が薄かった。この売り場を担当していた「花も・花鳥園」(＝現在も盛業中の川原鳥獣貿易の別の商号)は自社輸入をしていたことが後年になってわかったので、この広東産のクサガメも、この会社が輸入したものかもしれない。価格は270円と高価であった。

1974年(昭和49年)、誕生して間もない爬虫両生類情報交換会の会場で、当時、東大理Ⅱ生だった大河内勇氏(現・森林総研理事)が東京都内の三越日本橋店の屋上で「外国産のクサガメ」が販売されているのを発見したことを話された。早速、私が「調査」に赴いたのだが、この「外国産のクサガメ」と当時は在来と考えられていたクサガメの相違点はおおむね下記のようなものであった。「外国産」の個体では背甲の前端が腹甲の前端より後退している。体色が鮮やかで背甲の各甲板をふちどる所謂「金線」や腹甲の淡色部分が鮮やかなレモンイエローを呈する(図1A1とB1, A3とB3)。肋甲板が形成する隆条はより顕著で、隆条の外側には隆条にそった溝状の窪みが形成されない(図1A2)。在来と考えられていたクサガメでは隆条の外側と内側が窪み(図1B2)、かなり成長した個体でも粗面のある初生甲板(0歳時の甲板)が残存しているが(図1B2)、外側の窪みが無い「外国産」の個体では肋甲板の初生甲板は隆条の内側部分だけが残存しているのが普通である(図1A1)。足の裏の鱗板は可撓性かとうせいのない接地部分(足が地面と接する部分)を覆う大きなものとユビの屈曲のため可撓性のある非接地部分の小さなものの境界が明確で(図1A4)、在来と考えられていたものでは、その部位の鱗板の大きさが漸变的に変わるのとは異なる(図1B4)。また、第5趾の退化の程度がよわい(図1A4とB4; 青木, 1974b)。この「外国産」のクサガメは香港から輸出されていたもので、流通の経路から珠江水系に分布する個体群に由来すると推定されるが、このような形態の差は珠江水系に由来するとみられるクサガメが「日本在来」と思われていた朝鮮半島系のものと比較して歩行する能力が高いことを示している。つまり、水中で腹足類を摂食することに進化しているとみられる本種においては朝鮮半島系の方が、より派生的であると思われる。以下、便宜的に香港出荷とみられるものを珠江系、日本に在来だと思われていた朝鮮半島起原と考えられるものを朝鮮半島系と呼称する。

珠江系とみられるクサガメは、そのわずかな後に横須賀市の金魚店でも販売されているのを確認したので、おそらくは、その年のシーズンのうちに関東一円へ流通するようになったと想像される。1974年に流通していた個体は雌雄とも小型で前述のように背甲や側頭部の色が鮮やかで、朝鮮半島系のクサガメとは別種のようにすらあった。そのため、店頭では「きんせんたートル」という流通名を使用していたケースもあった。その後、ペットショップなどの店頭でみるクサガメの多くは、珠江系になっていった。この翌年だったと記憶するが、都内のペット業者である小林商事から日本爬虫両棲類学会の会員あてに爬虫類と両生類の価格表が郵送されたことがあり、その文面から、この珠江系のクサガメは香港から輸出されたものであることが推察された。私はカメ類に格別の関心を払っていたわけではないのだが、偶々、この頃、クサガメのオスはメラニズムを呈するらしいということに気づき金魚店などの店頭のクサガメを注意してみていた

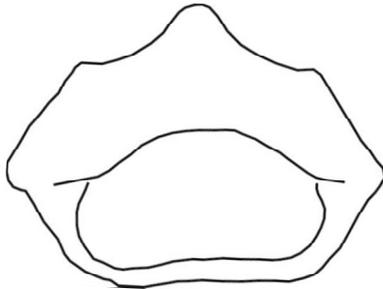
A1
背甲



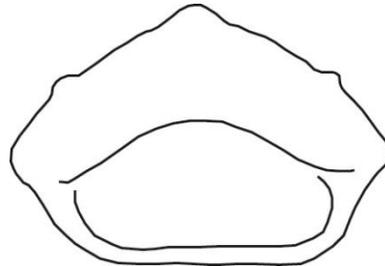
B1
背甲



A2
頭部方向からみた甲羅の形態



B2
頭部方向からみた甲羅の形態



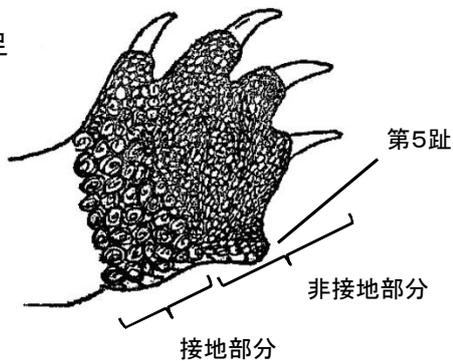
A3
側頭部



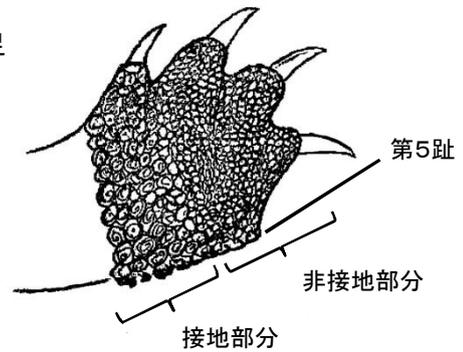
B3
側頭部



A4
後ろ足



B4
後ろ足



※接地部分：足が地面に接する部分

図1. 1974年(昭和49年)当時, 外国産として売られていたクサガメと, 在来と思われていたクサガメの相違点
A: 1974年当時外国産として売られていたクサガメ. 珠江系のクサガメと思われる. B: 1974年当時, 在来と思われていたクサガメ. 朝鮮半島系のクサガメと思われる. (青木,1974bより)

ので(青木, 1973, 1974a, 1978; 神戸, 1952; Mao, 1971), このタイプのクサガメが1974年になって初めて輸入されるようになったことは, おそらく間違いがないと思う。その後, ペット屋の店頭では珠江系のクサガメを見る機会が増えていった。どうせ「外国産」だろうということで, その後は調べることもやめてしまったが, 1980年(昭和55年)以降, 偶に調べてみるとペットショップの店頭のクサガメは珠江系のものが大部分になっていた。前述の体色が非常に鮮やかな個体は1974年頃しか見ることがなく, その後に流通していた珠江系のもは朝鮮半島系のものに体色が似ている。しかし, 前述の形質のうち, 肋甲板と後ろ足の形質で識別することができる。先述の広東産のもは朝鮮半島系のもと比較すると総じて体色が淡かったが, 珠江系の体色は変異に富み, 体色で朝鮮半島系と識別することは難しい。

大量に輸入された年から40年が経ち, これらの珠江系のクサガメが日本で野外に逃逸し, 自然の中で棲息していることは想像に難くない。Suzuki et al.(2011)は, 関東圏と九州圏で珠江系とみられるクサガメを確認しているが, これは, おそらく前述の東京と福岡の動物貿易商が香港経由で中国のクサガメを輸入していたことと関係があると推測される。

先日, 東京都杉並区の金魚店で店頭にあったクサガメをみたところ, 朝鮮半島系であった。国際貿易に依存しない金魚などの市場では, まだ, 国内で供給される朝鮮半島系のクサガメが流通しているようである。

たまたま1992年(平成4年)に参加した調査で, 房総半島の先端にある千葉県館山市の溜池で珠江系のクサガメが採集されたのを確認したことがあるが, 野外でカメの調査をしている方々が珠江系のもは朝鮮半島系のもを識別していないので, 少なくとも日本国内に2系統はあるクサガメの実態の更なる詳細はわからないことが遺憾である。

引用文献

- 青木良輔. 1973. クサガメのメラニズムについて. 爬虫両生類雑記 1(1):2-3.
- 青木良輔. 1974a. 再びクサガメのメラニズムについて. 爬虫両生類雑記 1(10):98.
- 青木良輔. 1974b. きんせんタートルについて. 爬虫両生類雑記 1(12):122-124.
- 青木良輔. 1978. クサガメの黒化個体. 両生爬虫類研究会誌 (10):3-4.
- 青木良輔. 2012. イシガメ, クサガメに会う. p.53-54. 片岡友美・若澤英明・小河原孝恵(編) 第14回 日本カメ会議 & ニホンイシガメシンポジウム講演要旨集. 認定NPO法人生態工房, 東京. (講演要旨)
- 鎌田篤・広瀬一美. 1998. ニホンイシガメ *Mauremys japonica* の皮膚糸状菌症について. 水産増殖 46: 377-378.
- 神戸伊三郎. 1952. 両棲爬虫学習図鑑. 東洋図書, 東京. 210p.
- Mao, H. S. 1971. Turtles of Taiwan. The Commercial Press, Taiwan. 128p.
- Suzuki, D. Ota, H. Oh, H.-S. and Hikida, T. 2011. Origin of Japanese populations of Reeves' pond turtle, *Mauremys reevesii* (Reptilia: Geoemydidae), as inferred by a molecular approach. Chelonian Conservation and Biology 10: 237. 249.